

## 個別の体験を通して描かれる 普遍的な爽快感を求めて

北村 夕香

一昨年の年末に、映画「K20 怪人二十面相・伝」を見た。映画自体は、私が勝手に期待していた江戸川乱歩へのオマージュでもなく、豪華なキャストと宣伝のわりには平凡な仕上がりだというのが正直な感想だった。しかし、一年を過ぎた今も、金城武演じる軽業師が、泥棒になるためのテキストを得て修行をするシーンを忘れることが出来ない。地図の上に一直線の線を引く。その線の場所を、ただだまっすぐに走る。川があれば川を跳び、ビルがあればビルを登る。自分の身体能力だけを頼りに、毎日毎日その線上を走る。泥だらけ、傷だらけになりながら、だんだん、我々が良く知っている怪盗のように、身軽で自信満々なさまに変化していく。その爽快感が胸を離れないのである。

なぜ、私は、そのシーンにこだわるのか。その問いに答えをくれたのが、『大ドロボウ五十五えもんのドロボウ学校』（吉田純子 ポプラ社）であった。一度もドロボウに成功したことのない三兄弟が、ドロボウ学校に入学し、ベリーグット生徒賞を目指して、他の生徒たちとともにドロボウテストを受ける。ダジャレとナンセンス、読者の期待と予想を次々に裏切りながら物語は展開する。単純でいて、何か哲学に届きそうな予感もあり、言葉にしようと思った瞬間にすべてが逃げてしまいそうな作品だ。自分の速度と、作品が求める速度と、読み進めるうちに、ピタッと寄り添ってくる爽快感。続編の『大ドロボウ五十五えもんの一日けいさつ署長』は風刺的要素も加わりさらに磨きがかかっている。

ただただ走る金城武に感じた、体の躍動をとまなう充実感、子どもの本に求められるものと同じなのかもしれない。特に、より小さな子どもたちのための本は、大人の理屈を感じたとたん、教育的な役割や、マスコミの描く今どきの子ども、中身の無い現代性に陥ってしまうのではない。個別の体験を通して描かれる普遍的な爽快感、その基準を大切に二〇〇九年の作品を振り返ってみたいと思う。『ゆっくり大きくなればいい』（最上一平 ポプラ社）山も川も、大人たちも、みんなが自分を見守っている。一人だから、二人だから、みんなだから出来ること。回り道をし、確認しながら成長していく少年の色濃く豊かな時間を描く。